時評

アンソロジーの面白さ

高山邦男

世の中に膨大な短歌作品がある中、それをセレクションした作品集がある。アンソロジーとか詞華集などと呼ばれている。研究者ならば原典をあたらなければいけないのだが、短歌作品は数限りなくあるので、アンソロジーを作ることは実は重要な仕事なのだと思う。古典の万葉集や勅撰和歌集でも編者や選者が選んだ作品が載っているのだから、大きな意味でアンソロジーといえる。今回はアンソロジーのあれこれについて考えてみたい。

まず、私が所持しているアンソロジーで特に重宝しているものをいくつか取り上げてみたい。最初に挙げておきたいのは『日本名歌集成』(學燈社)という本である。この本の一番の特徴は上代から現代までの歌人を網羅していて、生まれた年齢順に並べてあるところだ。最初は上代篇の須佐之男命から始まり中古篇、中世篇、近世篇ときて最後は近代篇の永田和宏で終わっている。つまり、短歌の歴史を一望できる作りになっていて短歌史のアンソロジーになっている。歌人の数が多く、調べ物をする時にとっかかりを作ってくれるのでありがたい。それぞれの歌人に歌は一首か二首程度なのだが丁寧な解説がついているので辞典的な要素も併せ持っている。また、附録として収録歌人解題・索引、収録歌書解題があり便利に出来ている。次に挙げたいのが『現代の短歌』高野公彦編(講談社学術文庫)である。こちらは巻頭が佐佐木信綱で明治期の短歌改革運動での新派以降からのセレクションである。解説には「全体として、故人となった歌人よりも、現在活躍中の歌人に重点を置いて人選した。」とある。ただ、一九九一年の発行なので、その現在もかなり過去になってしまったが、選歌がよくて近代以降の代表的な歌人の色が見えるアンソロジーになっている。また、この場では触れないが『現代短歌全集』(筑摩書房)は必携の書であることは言うまでも無い。

現在に視点を移すとふらんす堂から発行されている「○○の百首シリーズ」が面白い。「歌人入門」とサブタイトルがあるように百首の歌を鑑賞することによりその歌人への理解を導くという趣旨なのだろう。例えば、『若山牧水の百首』は長年、研究し考察され、様々な文献に目を通されてきた伊藤一彦の若山牧水研究のエキスが詰まっている本で珠玉の一冊と言っていい。同じような流れで、谷岡亜紀の『鑑賞#佐佐木幸綱』(本阿弥書房)も一首一首の鑑賞により、佐佐木幸綱を理解するための良い入門書で且つ佐佐木幸綱作品の論考になっていると感じた。

最後に取り上げたいのが『秀歌十二月』前川佐美雄(講談社学術文庫)という本である。「時(とき)によりすぐれば民(たみ)のなげきなり八代竜王雨(はたりりゅうわうあめ)やめたまへ」(金槐集)源実朝)を取り上げて「歌を見ただけでわかる。どうして大した傑物である。この歌はむろん実朝の代表作の一つだが、将軍としての貫禄は十分である。同時にそういう条件を抜きにしてもやはり希有の傑作である。」「この歌が数え年二十歳の人の作とはどうしても信じられない。それも事実であった。奇蹟のごとく思われる。」と記している。歌の鑑賞だけでなく前川佐美雄が作品に寄り添う息づかいが生々しく面白い。これもまた詞華集の魅力なのだと思う。